

## (2) 清里・陣場遺跡出土瓦の考古学的位置

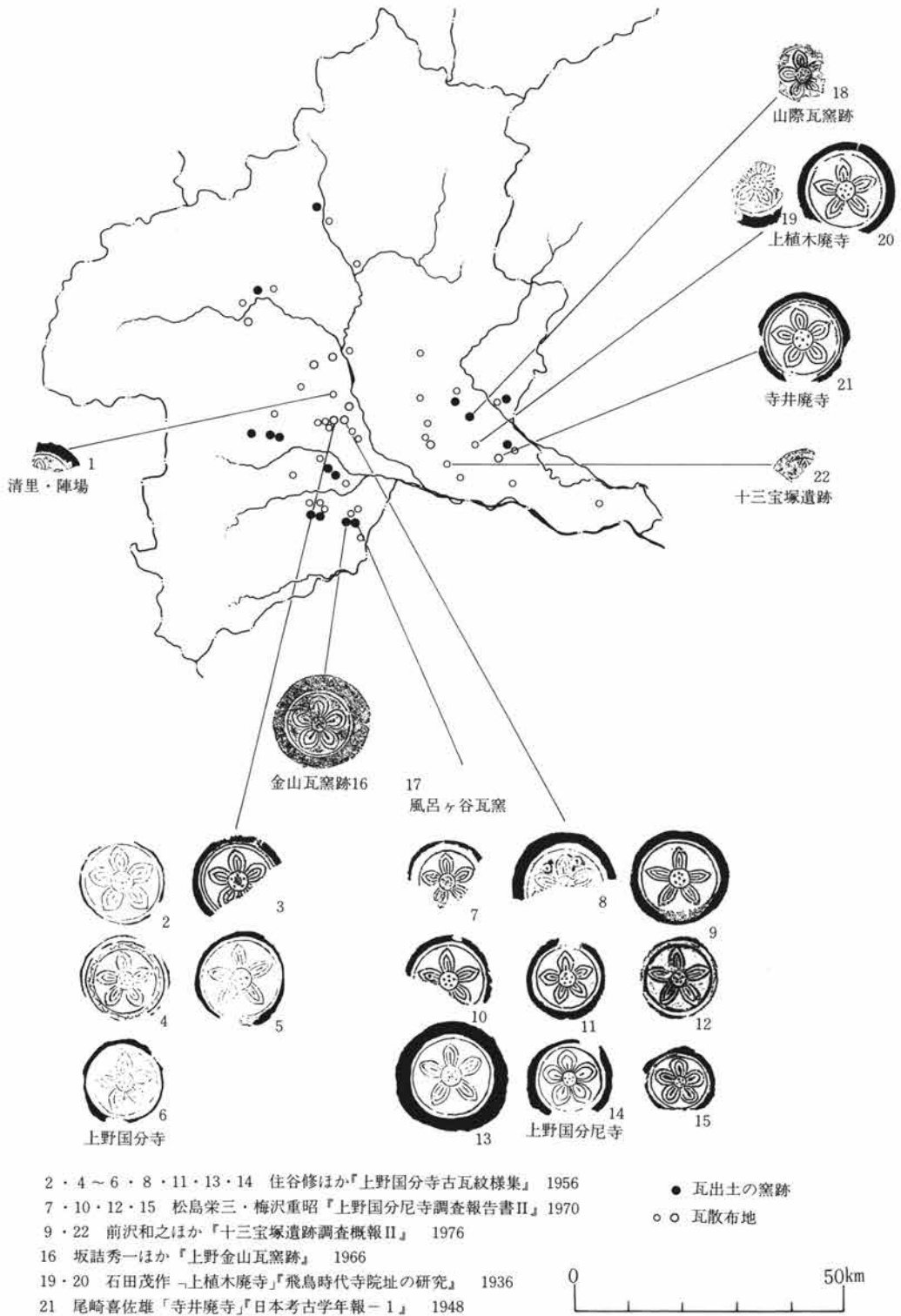
瓦類は観察の結果、平瓦では桶巻作りを2片認ることができ、総体を占める推定一枚作りとの間に作瓦技法の過渡的現象があり、軒丸瓦の年代的な見解と一致した。軒丸瓦は細片ながら、抽象文系の単弁2葉を数えることができ、直径20cmに対する円弧において5弁となり、弁端の尖形状、弁内部の郭形態から上野国分寺系瓦であることはほぼ誤りないところである。上野国分寺系は、上野国分二寺の建立に用いられた統一意匠をさし呼称されている。その上野国分寺の建立年代を瓦類から見た場合聖武天皇の詔の天平13年(741)に近い8世紀中頃と考えられる。それは次の解釈理由による。

- 1 軒丸瓦の内、外区間の列点連珠文の盛行期は群馬県においてすこぶる短期であったと解釈される。連珠文の盛行期は群馬県の第Ⅳ期類にあるが、瓦種は豊富でなく畿内、諸国分寺様式の意匠に多く流布されていることと異っている。このことは上野国で連珠文が盛行のきざしにあった段階に上野国分寺の統一意匠が定められ、その強い影響で連珠文の反映がこぼまれたと考えられ、上野国分寺建立時期を知る有力根拠となる。
- 2 多胡郡の建郡は和銅4年(711)であり、旧多胡郡内から出土する瓦の中に、編年的な画期が認められる。群馬県の軒丸瓦の第Ⅳ期類に類される中に、現多野郡吉井町池、雑木見出土の複弁7葉・複弁6葉の軒丸瓦があり、両者は一系統上で前橋市山王廃寺の創建瓦の後続様式でもある。山王廃寺の複弁7葉瓦は瓦変遷の操作から第Ⅲ期に類され、7世紀終末の頃とされる。この山王廃寺の複弁7葉瓦の意匠の終末はこの吉井町の散布地をもって終りに近いと考えられ一画期となる。山王廃寺の複弁7葉瓦を7世紀終末とすれば、吉井町の散布地の複弁7葉、6葉瓦の年代を8世紀初頭と推考でき、多胡郡の建郡と直接関連のある年代と言える。このことは群馬県の上野国分寺前代にある第Ⅳ期類の年代を知る有力根拠となる。

この2傍証から、国分寺前代の第Ⅳ期類は8世紀の前半段階にあり、第Ⅳ期に類される中の連珠文の反映期は極めて短期であり、それに続く国分寺の建立着手年代も、諸国の中では早い着工であったと考えられる。

第209図一9は上野国分二寺のうち尼寺の創建瓦に近く、それは僧寺の創建意匠との間に、巾の広い弁形態、肉置の端正さ、平縁周縁の狭さなどの後退様相が指摘されるためである。第209図一9を国分尼寺の創建段階に近いとした場合、尼寺の年代は国分寺の造瓦工人に一代以上のひらきがあったとしても8世紀後半段階を下らない所産と考えてさしつかえないであろう。

上野国分寺系の意匠の分布(248図)は上野国分二寺、上植木廃寺、寺井廃寺、十三宝塚遺跡などがあり、近年注目される資料が出された例に山王廃寺の発掘調査がある。同廃寺は、上野国分二寺より北東、約2kmの至近距離にありながら、上野国分寺系の軒丸瓦の影響種は存在するものの明確な出土例が知られておらず、あったとしても微弱と予測される。このことは、従来から山



第248図 上野国分寺系瓦分布図

王廃寺の建立に対して氏寺的とされたことと深く関連すると考えられる。さらに既成果である佐位郡衙の一端に目された十三宝塚遺跡から国分寺系瓦が出土した事実や県南平野郡の各造瓦生産地帯にゆきわたるほど国を上げての造瓦生産体制が取られたことを伴えると、この5弁の上野国分寺系瓦を官衙系瓦であるとして行うことができよう。なお、上植木廃寺、寺井廃寺に既出の国分寺系瓦は創建段階の建寺目的や存在理由を考える寺、地域の援助を受けながらも、東国経営のために国家的な造寺と類推され、国分寺系瓦が用いられたことに疑問は生じない。これらのことから官衙的建築物には上野国分寺系瓦が葺かれたものと考えられるのである。

ここ清里・陣場遺跡において上野国分寺系の瓦が使用されたことは、当遺跡存在の性格づけに重要な意味がもたらされ、少なくとも、官衙的性格をおびる瓦葺の建物が周辺に存在したと推考される。平・丸瓦の整形技法や胎土には、質差があり単一の瓦供給でないことが明かで、造瓦生産地域が複数であったと考えられる。それは、清里・陣場遺跡を擁する地域は榛名山系およびその第四紀形成の地域に当り、瓦原料の得られる地域は周辺になく、供給には藤岡窯跡群、吉井窯跡群、乗付窯跡群、秋間古窯跡群、里見古窯跡群など県南部の生産地域が推測される。

当遺跡に近接する大規模造瓦生産地域は秋間窯跡群にあり、秋間窯跡群の形成された基盤上は秋間層とよばれる中に良土を産する。県内の須恵器生産地域としても最良質で、狭雑鉱物が少なく酸化鉄とされる黒色鉱物粒の存在が顕著で一見して判別が可能である。ここ数年来、県工業試験場において継続している胎土分析からこのことが裏付けされる。秋間窯跡群の瓦においても、意識的な原料合成をしているためか狭雑物は存在するものの、酸化鉱物粒の特徴が顕著にあらわれている。この特徴を持つ瓦類は、縄印による、平・丸瓦の一群で、平瓦6片、丸瓦2片で総数63片中、8%強の割合となっている。軒丸瓦片を含むそのほかの瓦類は、大粒な白色鉱物粒をまじえるなど胎土傾向が異なるため、他の生産地域が考えられ、供給された瓦類に複数の需給関係が類推される。しかし秋間古窯跡群は近接しているものの、それより遠方の生産地域の製品に主体が推測されるため、なぜ遠距離生産地から主体量もたらされているか新たな疑問点が生じる。このことは官衙に対する規制の働く特殊な需給状況とも思われるが、今後、複数遺跡例の傾向を検討し、徐々に解釈の努力をしなければならないであろう。

(大江)

1. 大江正行「上野国分寺に先だつ軒丸瓦の諸段階」『金井廃寺遺跡』(吾妻町教育委員会)1980
2. 大江正行、川原喜久治「天台瓦窯の存在意義をめぐって」『天台瓦窯跡』(中之条町教育委員会)1982
3. 井上唯雄ほか「上野国分僧寺域縁辺の調査」(群馬町教育委員会)1975
4. 松島栄二、梅沢重昭「上野国分尼寺跡発掘調査報告書」(群馬県教育委員会)1969  
松島栄二、梅沢重昭「上野国分尼寺跡発掘調査報告書II」(群馬県教育委員会)1970
5. 石田茂作「上植木廃寺」『飛鳥時代寺院址の研究』1936
6. 尾崎喜佐雄「寺井廃寺」『日本考古学年報—1』1948
7. 前沢和之「瓦類」『十三宝塚遺跡発掘調査概報II』1976
8. 1977～1979までに出版された(前橋市教育委員会)『山王廃寺跡第3次～5次発掘調査概報』による。
9. 花岡紘一「土器の胎土分析について」『塚廻り古墳群』(群馬県教育委員会)1980  
花岡紘一「瓦の胎土分析」『天代瓦窯跡』(中之条町教育委員会)1981